

カトリック六甲教会 教会報

2009

8

No.452

「ともに捧げるミサ」

片柳 弘史 助任司祭

早いもので、昨年9月に叙階されてから1年になろうとしている。近頃は、ミサで間違ってもだいぶ少なくなってきた。落ち着いて自分自身のミサの立て方を振り返ってみると、まだまだ考えなければいけないところがたくさんあるように思う。

近頃、特に心がけているのは「わたしがやる」という気持ちをなくして、すべてを神様に委ねるということだ。最初からそう心がけてはいたのだが、やっているうちにどうしてもみんなを元気づけようとか、いい話しをしようというような気持ちが出てきて肩に力が入ってしまうことが多かった。自分を捧げようという気持ちさえ、行きすぎて自己主張のようになってしまったことがあった。みずぼらしい自分の姿を、技術でごまかそうとしたこともあった。そんなことでは肝心のキリストの影が薄くなることに、近頃ようやく気づき始めたのだ。

ミサの中で、司祭はキリストの目に見える姿として奉仕する。私は消えて、私の向こう側にキリストがおられるのが透けて見えるようであればならないと思う。司祭の声やしぐさは、会衆と「神の国」をつなぐ透明な媒体であるべきだ。私を通して、ただキリストの力だけが現れるようにしたい。

ミサを立てるときにもう一つ大切なのは、会衆に心を開くことだと思う。ミサのあいだ、会衆からとても大きな力が流れ出している。真剣に祈る姿や、真心のこもった歌声などを通して、会衆からもキリストの力が流れ出しているのだ。司祭が説教をしたり奉献文を唱えたりしているとき、会衆は何もしていないかのようにも見えるが、実はそんなことはない。真剣に聴いたり、うなずいたり、あるいは一心不乱に祈ったりしている姿から大きな力が発せられている。その力を受け止め、その力に身を委ねながら、司祭はミサを進めるべきだと思う。自分のことばかり考えて、会衆に心を閉ざしてしまうことがないようにしたい。

こうして、司祭が発するキリストの力と、会衆が発するキリストの力が響き合ってミサが作り上げられていく。司祭と会衆が自分をキリストに捧げるとともに祈ることで、キリストの力が聖堂を満たし、ミサを作り上げていくのだ。一回、一回のミサに、自分の全てを捧げていきたい。





みんなの広場

みなさまの分かち合いの場になれば、と「みんなの広場」を設けました。みなさまから原稿を頂戴しなければ成立しないコーナーです。どうぞご参加下さい。

古希の祝い

7月10日に昭和14年生まれの方の「古希の祝い」のミサが行われました。この教会には30数名の方が信徒台帳に登録されています。何人の方が参加されるだろうかと思いましたが、当日はお元気な8名の方が参加され、古希まで元気に過ごされた感謝を奉げられました。残念ながら参加できなかった方々のためにも共同祈願がささげられ、祈られました。(藤原)

古希のミサに与って

佃

主任司祭松村信也神父様により、思いがけず祝福の御ミサに与り、大変恵まれ、感謝しています。私は1939年9月第二次世界大戦が始まり、ドイツがポーランドへ侵攻した年の1ヶ月前、昭和14年8月1日生まれです。昭和26年の小学校卒業式で、日米講和条約締結のことを聞きました。御ミサで松村神父様は、ご高齢までご健在だったご母堂様への感謝を述べられ、私たちへ自分を育てて下さった全てのものに感謝すること、キリストに出会い、生かされて、生きている自分に気づき、親の恩溢れる愛を次世代に伝えて行くことを承りました。

神父様は日本の平均年齢について、昭和50年には男性58歳、女性61歳で、去年は男性79,1歳、女性86歳ですと、データからも出席の古希友に語られ、まだまだ宣教を荷って行くにはあと何年も？あると、御言葉を通じて激励を賜りました。老いも少し撥ね退けて……引き続き水面にパンくずを投げているような仕事かも知れませんが、この小さき者にも神様がキリスト幼児教育を、生涯現役として続けさせてくださる喜びと共に、思いを新たにいたし、あり難く、感謝の気持ちでいっぱいでございます。

…六甲教会俳句同好会「二水会」で、年始に詠ませていただきました。

「新暦 凜として わが古希の日も」

※ 古希 ……中国の唐代の詩人杜甫の「曲江詩」に『人生七十古来稀なり』に由来し、**数えの70歳**（満69歳）のこと。昔は70年生きる人は希であったことから長寿の祝いとされている

“両形態による聖体拝領の方法”

- 2009年7月9日大阪教区池長大司教から「信徒の両形態による聖体拝領の方法」について、次のように発表されました。
 - (1) 司祭や任命された奉仕者から直接ご聖体およびカリスを受け取って 拝領する。
いったん受け取ったご聖体を、自分でおん血につけて拝領しない。
 - (2) ご聖体をおん血に浸して拝領 (intinctio) する場合は、司祭や任命された奉仕者が直接拝領者の舌の上に置く。
いずれも 2009年7月9日より実施する。
- この指導を受けて六甲小教区では、主日、大祝祭日におけるミサの中で両形態を指示通り実践することは、物理的に困難であることから主日、大祝祭日における両形態を行わないことにします。
- 但し、小グループ、黙想会などで行われるミサにおいて上記の指示通りに行うことは自由です。

“病者の塗油の秘跡について”

- 2000年大聖年の2月11日「世界病者の日」にローマ教皇が聖ペトロ大聖堂において、年老いた人や病人に対してミサの中で特別に“病者の塗油の秘跡”を授けました。これは“2000年の特別行事”であり「恒常的にこの様に秘跡を実践しなさい」ということではありません。
したがって、「世界病者の日」のミサ中に“病者の塗油の秘跡”を授けることはいたしません。但し、希望される方にはミサ後、引き続き“病者の塗油の秘跡”を行うことは可能です。
秘跡は“神からの恵み”であり、それに相応しく授かるためには、“ゆるしの秘跡”にあずかり、その後、“病者の塗油の秘跡”にあずかることが望まれます。老いて病弱になられた方、手術予定の方、入院予定の方で“病者の塗油の秘跡”を希望される方は「世界病者の日」に限らず、いつでも自由に司祭に申し出て下さい。

主任司祭 松村信也

事務受付より

- 8月より自転車・バイクの置き場所が藤棚の奥の倉庫の前に変更になります。厳守して下さい。
- 車で来られる方は、必ず車のフロントガラス前の見える場所に、「駐車許可証」をご提示下さい。
- 省エネのため、空調は冷え過ぎないように！（26～27度に設定）また使用後の部屋の電気、空調などの消し忘れに注意して下さい。

各部だより

婦人会

今月の行事はありません。

壮年会

今月の行事はありません。

青年会

8月9日(日) 12:30 定例会(助任司祭室)

内容:「納涼の夕べ」の確認、分かち合い

8月22日(土) 18:00~20:00 納涼の夕べ

※8月23日(日)は定例会はお休み

典礼部

8月23日(日) 10:00 ミサ後、

朗読奉仕者勉強会(主聖堂)

対象は朗読奉仕者です。

養成部

8月29日(土) 8:00~17:00 聖書朗読リレー

1人15分で、ご希望の方はご希望の

時間で申し込んでください。

社会活動部

手芸の集い、炊き出し、手作りコーナーは

8月中お休みです。

< お知らせ >

■ 神戸地区 平和旬間行事:

● 第4回“広島平和への道”巡礼

8月5日(水) 10:00 広島駅南出口集合 23:20 新神戸駅解散

3コースあります。委細はチラシをご覧ください。

● “平和の祈り”

8月8日(土) 13:00~16:00 開催場所:神戸中央教会 聖堂

・第1部 スライド劇 「ぼくらの九条甲子園」 大阪教区青年有志

・第2部 “山口ブラザースバンド”演奏とお話し

・第3部 交流会



■ 六甲教会 平和旬間行事:

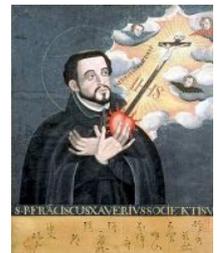
● “平和を祈る”

8月7日(金) 10:00 初金ミサ、ミサ後 李神父講演会

● “合同礼拝”

8月9日(日) 13:30~14:30 開催場所:六甲教会主聖堂

・説教 「フランシスコ・サビエルが伝えた平和」 松村 信也 神父



■ 大阪教区 平和旬間行事:

● “へだての壁を越えて”

8月9日(日) 13:00~16:00 開催場所:大阪カテドラル聖マリア大聖堂

・司祭、修道者、こどもによるコーラス ・小森 陽一氏講演会 ・平和祈願ミサ

2009年6月29日 「テゼの祈り in 神戸」

～片柳神父ブログ「道の途中で」やぎい日記(49)(50) 「テゼの力」より～

片柳 弘史 神父

昨日の晩、六甲教会で歌と沈黙による祈りの集い「テゼの祈り in 神戸」が行われた。訪日中のテゼ共同体のブラザー、ギランさんを指導に招いての本格的なテゼの集いだった。わたしはそれほどテゼに詳しいわけでもないのだが、行きがかり上今回の集いの呼びかけ人の1人になり、会場を準備するという大役を引き受けてしまった。

そもそも今回の集いは、昨年「神戸市民クリスマス」に端を発している。市民クリスマスの準備委員会にたまたま聖公会と日本基督教団の若い教職者の方々が参加しておられ、彼らと親しくなったのがことの始まりだ。復活祭のときには、このブログでも紹介したとおり、彼らと一緒に若者を中心としたテゼ形式の祈りの集いをした。そのときの体験がとてもよかったので、ぜひまたやろうということになっていたところへブラザー・ギラン来日の知らせが入り、今回の企画となった。

ギランさんの指示に従って開始の3時間前くらいから準備が始まった。キャンドルやイコンはもともと教会にあったし、近所の教会からも持ってきてくださったので豊富だった。ギランさんのアドバイスに従ってそれを並べていくうちに、1時間ほどで立派なテゼ式の祭壇が出来上がった。

開始の1時間くらい前から参加者の方々が到着し始めた。平日の夜だし、雨も降っているからきっと参加者は50～100人くらいだろうと予想していたのだが、予想以上にたくさんの方が集まってくれた。途中で準備していたパンフレットがなくなり増刷するという事にまでなった。結局、遅れてきた方も含めると参加者は200人を超えたようだった。

祈りの集いは、始め聖堂の向い側にあるホールで始まった。聖堂を祈りだけの場にするために、歌の練習やテゼの活動の紹介などは別の場所で行うことにしたのだ。ホールいっぱい席を並べたのだが、あまりの人の多さに開始の直前に席がなくなり、立ち見の人たちが出てしまった。わたし自身は聖堂のキャンドルの準備などのためほとんどホールにいられなかったのだが、外から覗いた限りではみな熱心にギランさんの話を聞いているようだった。

ようやく聖堂の準備が終わり、聖堂で待っていると、歌の練習などを終えた人々が聖堂に移動してきた。いよいよ祈りの集いの本番だ。集いは、おなじみのテゼの歌の繰り返しから始まった。祈りが始まるともうギランさんからのアナウンスはほとんどなく、歌と静寂だけが聖堂を支配していった。

何曲か歌って参加者たちの息が合ってくると、200人の歌声は小刻みに聖堂を揺さぶるほどの力強い響きに変わっていった。建物や体だけでなく、魂さえも奥深いところから揺さぶられるような歌声だった。今ここで教派の違いを越えてキリストの弟子たちが一堂に会し、この歌声を作り上げているのだと考えると、思わず涙がこみ上げてきた。イエス・キリストを囲んで神を讃える人々の歌声は、「神の国」の到来さえも感じさせてくれた。周りを見まわすと、涙を拭いているのは私だけではないようだった。

プログラムが終わりに近づいてくると、「このまま、いつまでもこの集いが続けばいいのに」という気持ちになった。教派を越えてこれだけの数の人々が共に祈るこんな集いが、こんどいつ実現するかまったく分からないからだ。すべての歌が終わった後も、しばらく会場を離れがたい気持ちが残った。

祈りの集いのあと、ホールに戻って教会の交流会を行った。それにも3分の1くらいの人が残って参加してくださった。はじめはみな緊張していたようだったが、すぐにあちこちで話の輪が出来上がり、これまででは考えられなかったような出会いがいくつも生まれたようだった。

思いがけない人数に対応するために、たくさんの信者さんたちのお世話になった。この場を借りて、心から感謝したいと思う。



*片柳神父ブログには、当日のプログラムと写真が多く掲載されています。そちらもぜひご覧ください。

「テゼの祈り in 神戸」に参加して

青年会 川崎

以前から、テゼの祈りは大好きでとても楽しみにしていました。当日は、普段関わりの少ないプロテスタントの皆さんが大勢集まり、これから共に祈ることを考えると、気持ちがそわそわとしていました。お聖堂に入ると、いつもと違いイコンの周りにはたくさんのローソクが灯され、暗いお聖堂の中は幻想的な雰囲気になっていました。私は、一番前に敷かれている絨毯の上に腰を下ろし、ろうそくの明かりに照らされていたイコンを見つめていました。そんな中、静かに祈りは始まりました。

最初は聴きなれない曲に小さな声で歌っていた私達も、繰り返し賛美していくうちに声は大きくなり、私達の気持ちも一つになっていくのを感じました。

始まる前に感じていたそわそわした気持ちはいつのまにか一つになれた喜びへと変わっていました。

交流会では、多くのプロテスタントの方と知り合うことが出来ました。お互いに知り合い、一致へ向かうこの集いが継続されていくことを願っております。



典礼奉仕者の集いに参加して

橋岡

6月21日の午後、典礼委員会が準備して下さる奉仕者の集いが開催されました。2回に分けて行われる1回目でしたが、この日は50名を超す出席者で、六甲教会の皆さんの御ミサを良いものにしようという真摯な姿勢があらわれていました。

初めのお祈りに続いて、コリンズ神父様のお話。まず六甲教会の御ミサはAクラスとは言わないまでも、B+であるとのこと評価と奉仕者に対する感謝とねぎらいのお言葉をいただきました。

続いて「御ミサを捧げる心について」のお話でした。神様は物、出来事、人物を通して私たちに聖霊の働きを見せて下さる。私達はさまざまなことを通して、現在の霊をつかむことが大切である。

そして御ミサの流れに沿っての一つ一つの意味と私達のあるべき姿勢についてお話をいただきました。毎回の御ミサに与る意味が日常に流されていきがちな私達にとって、自分の姿勢を見つめなおす大変良いチャンスとなりました。

典礼部から良い典礼を目指すためのアンケートについてのお話があり、その後6つのグループに分かれての話し合いがありました。大変な盛り上がりで、今後は同室では聞こえづらいので別の部屋を用意する方が良いという話が出たほどです。「ミサに向かう姿勢、気持ちについて」や「現在のミサについて気付くこと」など各グループで話合われた内容が発表され、それぞれに意義深い時間を過ごされたことが分かりました。

幅広い年齢層の多くの方が御ミサで奉仕をされていて主日の御ミサが成り立っていることは、六甲教会のとても素晴らしい部分だと思います。その結果、いただいたB+評価ですが、毎回の典礼奉仕が習慣化されて流されることなく、奉仕者がそれぞれ新鮮な気持ちを持って御ミサに臨み、ますます良い典礼を作っていくことができるよう努力できればと思います。

📖 図書紹介

『神の発見』 (五木寛之著 対話者：森 一弘 平凡社 1400円)

私たちいわゆる団塊の世代にとって、1960～70年代の「青春」を象徴する作家の一人であり、皆様よくご存知の直木賞作家・五木寛之は近年、当時の若者のバイブル的な作品とはまったく趣を異にした、文明批評や求道的ともいえる作品を数多く発表しています。ご紹介する本書は、著者がカトリック教会のスポークスマン、カルメル会の森一弘司教との対談を、短い感想を挟みながら9つの章にまとめたものです。仏教とキリスト教との対比を軸に、〈神との出会い〉〈慈悲と救済〉〈日本人とキリスト教〉など様々なテーマについて、とても自然で和やかな雰囲気のうちに対話が進んでゆきます。

宗教をテーマにした対談ではありますが、決して小難しい哲学論争といったものではなく、私たちが日々ふっと抱くような疑問を、著者が単刀直入に投げかけ、それを森司教が率直にユーモアを交えながらさばいていく、またその逆に、著者の披瀝する仏教に関する豊富な知識に、森司教が感心される場面も時折見られる、といった気の張らない読み物になっています。

たとえば著者は対談の冒頭で、いきなりいわくつきの世界的大ベストセラー『ダ・ヴィンチ・コード』を話題として取り上げ、森司教は「好奇心を満たすミステリーとしては楽しんだが、作者の憶測は下衆のかんぐり」と斬って捨てます。また、〈意外とネクラな聖書のメッセージ〉〈他力は自力の母である〉〈人間に謝る神のあたたかさ〉〈天国にはユーモアがない?〉〈隠れ念仏と隠れ切支丹〉など、小見出しを幾つか拾ってみると、2人の対話が興味深い展開を示していることが、お分かりいただけると思います。

「まえがき」に当たる〈ブディストがキリストを訪ねる旅のはじめに〉で、「私は勝手にブディストだと思っている。ブッダと一般に呼ばれる釈迦に深く共感し、その思想と生き方に帰依してきた。しかし奇妙なことに、いつ読んでも感動するのは聖書である。(中略)『和魂洋才』というスローガンには、大きなごまかしがあるのではないか。洋才には本当は深いところで洋魂とでも呼ぶべき精神のありようがあつて、それが才という技術やシステムを支えているはずである。・・・その根にあたる洋魂とはなにか。それがキリスト教的文化であることは、すでに誰もが知っていることだ。」と述べているように、仏教に関する造詣の深さ、宗教に対する真摯な姿勢、そして、現代文明に対する鋭い洞察眼を持って、著者がこの対談に臨んでいることは言を俟ちません。

(石光)

大木 章次郎神父の講演「ネパール生活 30 年」

7月26日(日)の11時ミサは、大木神父・松村主任司祭・片柳助任司祭の共同司式で行われ、ミサの説教では大木神父が「ネパール生活30年」の苦労話なども話された。ミサの後も1時間に亘る講演会が催されたが、その中で大木神父は司祭になられた動機などをユーモアも交えながら話された。

大木神父は戦争当時、人間魚雷「回天」の訓練中に広島に原爆が落とされ、終戦を迎えられた。「君たちの命は後1ヶ月だ」などと言われながら、生き長らえることになった神父は、イエズス会に入会する決心をされた。しかし神父になることを反対したのは家族だった。「お前みたいな悪が神父にはなれない」と云うのが理由で、どうしても神父になるのなら私達が支えなければと、姉妹6人が全員シスターになられたと云う話を聞き、聴衆から感嘆ともいえるようなため息がもれた。

神父になられてからは、カトリックのミッションスクール栄光学園、広島学院、六甲学院の先生として赴任され、多くの生徒が先生から「Men for others」の精神を学んだ。

1977年に単身ネパールに渡り、宣教活動を始められたが、当時ヒンドゥ教を国教としていたネパールでの布教は、困難を極めたそうです。ポカラでは障害者の施設で働くかたわら、塾を開かれ、この30年間でカトリック信者も150名近くに増えていた。

現地での後継者も出来たので、この4月に帰国された大木神父は、今永年の夢である、聖堂建設に取りかかっているとのことで、その資金集めに奔走されているそうです。



8月の予定

日	曜	教会 暦	教会 行事
1	土	聖アルフォンソ(リゴリ) 司教教会博士	
2	日	年間第 18 主日	7:00 10:00 ミサ 17:00 海星病院集会祭儀
4	火	聖ヨハネ・マリア・ビアンネ司祭	
6	木	主の変容	
		日本カトリック平和旬間 (15 日まで)	
7	金		初金 7:00 10:00 ミサ ミサ後、李神父講話
8	土	聖ドミニコ司祭	
9	日	年間第 19 主日	7:00 10:00 ミサ 13:30 平和旬間合同礼拝 17:00 海星病院集会祭儀
			教会学校キャンプ (8/9~8/12)
10	月	聖ラウレンチオ助祭殉教者	
11	火	聖クララおとめ	
14	金	聖マキシミアノ・マリア・コルベ司祭殉教者	中高生会キャンプ (8/14~8/17)
15	土	聖母の被昇天(祭日)	7:00 10:00 ミサ
16	日	年間第 20 主日	7:00 10:00 ミサ 17:00 海星病院集会祭儀
20	木	聖ベルナルド修道院長教会博士	
21	金	聖ピオ十世教皇	
22	土	天の元后聖マリア	17:00 ミサ (19 時ミサはありません) 納涼の夕べ
23	日	年間第 21 主日	7:00 10:00 ミサ 17:00 海星病院集会祭儀
24	月	聖バルトロマイ使徒	
27	木	聖モニカ	
28	金	聖アウグスチヌス司教教会博士	
29	土	洗礼者聖ヨハネの殉教	8:00 聖書朗読リレー
30	日	年間第 22 主日	7:00 10:00 ミサ 17:00 海星病院集会祭儀

広報部員のつぶやき

8月の教会は、蝉の鳴き声が聞こえる以外比較的静かな雰囲気にも包まれる。子ども達はキャンプに出かけ、大人たちの多くの行事は夏休みとなる。しかし、8月はまた多くの生命が失われた広島・長崎の原爆を始め、戦争の悲惨さを思い出させる月でもある。私自身、終戦の年はまだ2歳になったばかりで、全くと言っていい程戦争のことは覚えていないが、両親の話や書物、映像などで戦争の悲惨さを知った。

今も世界のあちらこちらで紛争が起こり、その度に貴重な命が失われている現実を見るにつけ、「平和」の大切さを強く感じている。

今年も教会の内外で「平和旬間」に関するいろいろな行事が予定されているが、この機会に今一度「平和」について静かに考え、祈り続けたい。(T. H)

教会報9月号の発行は、8月30日(日)です。

編集会議は8月23日(日)です。

記事原稿は、8月16日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。 (広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会

〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21

電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6

発行責任者 松 村 信 也 神 父

編 集 広 報 部